死に至る病

――キリスト教における人間の生と死の重み――

秋田　稔

1

デンマークの思想家キルケゴール（Sören Kierkegaard）の著書「死に至る病」(Die Krankheit zum Tode, 1849）は，新約聖書ヨハネ福音書11章4節の「この病は死に至らず」の引用から筆を起している。「それにもかかわらずラザロは死んだ。」ラザロは確かに死んだ。「にもかかわらずこの病は死に至らない。」それでは「死に至る病」とは何であるか，こういう問題提起を，かれはしているのである。

キルケゴールが言おうとしていることは，肉体の死は死にちがいないが，真の死とは限らないし，肉体の病は死に至る病とは限らない。人間，このかけがえのない人間にとっては，肉体の死以上の，真に恐怖すべき死というものがあるし，このような死に至る病は，肉体の病以上なのだ，ということであろう。このような考え方をする根拠には，次のようなことがあると思われる。それは，人間は単なる自然あるいは肉体ではなくて，かれ流のことばを使うなら，精神であり自己であるからである。精神であり自己であるということは，自己に対してかけがえのないものとして関心を持ち，ことばの厳密な意味において自覚的に生きるということであろう。解りやすく言うと，わたしはいったい何者なのだ，と自らに問い，しかもそれに答えるべき当のもの，それが人間なのだということである。

このような精神であり自己であり，決して客体化されない主体たる人間にとっての真に「死に至る病」とは何か。かれはそれを「絶望」ということばであらわしている。この絶望とは精神であり自己である人間の自己喪失というようなことである。自己喪失の根源は，実は自己の内奥，すなわち自己自身にあるというのである。人間は単なる自然存在ではなく，いわば人格的存在であるが，人格は他の人格に対してはじめて人格であって，人格の問題は，信と不信，希望と絶望，愛と憎しみなどのはざまの意志的決断の問題にかかわっているといってよいであろう。不信，絶望，憎しみ，不安のただ中

にあり，人間を人格として真に成り立たせ，支えているところの，信頼，希望，愛，平安に生きるという人間の根源的生，主体性を喪失して虚無に陥っていることを，かれは絶望という一言であらわそうとしているのである。

このようなことを強くうちだしていることは，かれの個人的体験にもとづくことのロゴス化であるとともに，同時代の状況へのかれの抵抗の姿勢が明確に表白されているともいえる。現存秩序の絶対的肯定，自己神化，自己満足，このような自己完結的既成秩序の中にとっぷりひたって無自覚的に生きる人びと，絶望を知らない，それこそ自己自身を知らないのであるから絶望的なことであるが，そのような人びとが横行闊歩し，否，問題を避けて通っている時代状況に対し，かれは挑戦しているのである。

かれのいう真に人間たるの生は，永遠の生なる神との関係にある生であり，真の人格である神によって人間は人格的存在として呼び出されている，とかれはみる。このような人格的生の喪失は，実は根源的な「関係」の否定として，人格的な呼びかけにこたえないことであり，それが「罪」である。

このように，キルケゴールは，生と死の問題を単なる自然的な死の問題にとどめず，さらに深く掘りさげて，人間の人間らしい生き方の根底にまで入っていって，死を，いわば永遠の死の問題，真に人間が人間として生きる根底的な関係である神との関係の断絶の問題として把握している。したがって「死に至る病」とは，信ずるか躓くかの「あれかこれか」の決断を回避すること，あるいはそういった決断に絶望することといった事柄だといえよう。

2

ここで，かれが，何故自己自身に関係するところの関係であるという自己，あるいは精神としての人間がその生の根底を絶対人格たる神との関係におくのか，かれのいう神とはいかなる神であるかという問題にふれたい。

このことは，人間にとって自明なことであり最終的なものと思われる「自己」はその存在を決して自己自身に負いえないし，負うていないというかれの深刻な体験からの結論，そしてそれをさらに否定的にのりこえて，それでも人間は実存し，生きることができるし，生きることができたのは――まさに逆説的であるが――自己の存在を根底的に絶対人格たる神に負うているからであるというかれのいま一つの体験，実存の全部をかけて「然り」とうなづかしめられたという体験からの結論であるといえよう。それは，単なる思惟ではなく，かれの実存をかけてのことなのである。そして，これはかれの

個人的な体験的結論というよりも，聖書が全体として，特にイエス・キリストにおいて示すところの，すべてのものにとっての根源的な事柄（Sache）であると，かれはみているのである。かれの神はたしかにキリスト教の神であるが，教義的に，あるいは世界観的にわれわれが措定する絶対者たる神とはいささか異なるし，また何とはなしに畏れ，前提としている宗教的感情の対象たる神とも異なる。かれのキリスト教への基本的態度は，キリスト教は教義ではないということであり，キリスト教はいわゆる「宗教」ではないということである。それに気付かず，むしろ教義の素晴しさに驚嘆し，宗教的心情の中で讃美することで自己満足している間に，キリスト教界はキリスト教を自分で抹殺してしまった，とかれは指摘する。かれが神と人との関係というとき，聖書のイエス・キリストとわたしたるその人自身との実存的なかかわりのことをいうのである。

聖書のイエス・キリストとこのわたし自身との実存的かかわり，一切の概念的，直接的思惟をしりぞける，それでは決してわからない，いわば断絶，孤独をつきやぶるかかわり，躓くか信ずるかのあれかこれかの前に立つかかわり，これを明らかにするために，かれの聖書解釈についての基本的態度を若干問題にしよう。このことにかかわって，かれは恋文のたとえを出す。かれによると，聖書を読むことは恋人からの便りを読むに等しい。それは心から心への，あなたからわたしへの個人的語りかけとして読まれるべきである，とかれはいう。恋文でお互いの心が通じ合うか否かは，結局は互いに信ずるか否かであろう。如何なる客観的観察などによっても通じ合えないことである。これと同じように，血と涙とをもって福音書のイエスに肉薄するとき，イエスが福音書の記者に，また福音書の中でイエスがかれと同時代の人にかかわったそのかかわり，人格と人格との全実存をかけての呼びかけと応答のかかわりが，後世のわれわれにとっても本質的に同時代人としてひとりの具体的な人間たるイエスとこのわたしとの全人格的な信ずるか躓くかの出会いとなる。しかもこの人間イエスとの出会いにおいて，直接的伝達が不可能な根源的なこと，すなわち神と人との出会いを信ずるか躓くかの問の前に実はわれわれが立たされているのだ，とかれはいう。かれの神は，人間の一番根源的なことにかかわって決断をせまり，否，決断の条件を与える神であり，神をみようとするものはこの人（キリスト）をみよ，との挑戦の前にわれわれは立っているのである。このような聖書解釈の基本態度から，かれは聖書の生と死についての究極的なつかみ方をきわめて正確に理解し，自らの

ものとしているのである。

3

さて，聖書の生と死の把握の仕方の一番基本的なことは，きわめて単純なことでもあるが，生と死とを非常に明確に区別していることである。生はかけがえのない人間の生であり，死とはまさしくこのような生のすべてからの断絶であって，生の文字通りの終末である。したがってギリシアの霊魂不滅の考えとか，自然宗教の四季の移り変わりに応じた生死の一種の輪廻思想とは画然と区別されるべきものである。聖書は，比類ないきびしさをもって生か死かという問題を提出している。その中間はない。

このような考え方を生んだ背景には，聖書の人々の風土の問題もかかわるが，同時にかれらの歴史の問題もかかわっていると思われる。

かれらの育ったパレスチナ地域は，メソポタミヤとエジプトという古代の二大権力にはさまれた一種の中間的緩衝地域である。かれらの民族成立の物語をみても，かれらの先祖アブラハム，イサク，ヤコブたちのメソポタミヤ出立の苦難の物語，さらにはかれらが一度落ち着いたエジプトからモーセに率いられて脱出しパレスチナに定着するという，二つの脱出物語が，これを性格づけている。かれらは，民族として生死の境を行く苦難に満ちた出発をした。その点からも，生と死の問題については独特の感覚をもつに至ったといえよう。

また，風土の面からいってもそうである。パレスチナは，西は地中海に面した単調な海岸線で，あまり海の幸を利用しえず，北方は山地，南と東はものすごい砂漠である。乾燥期の如きは，まさに死を思わせるきびしい自然がすぐ隣りにある。このような環境のただ中に細々としてつづく沃地帯が，かれらの定着した土地である。沃地といってもやせた山地が大部分であり，ただ砂漠時代のかれらの苦しみにくらべれば乳と蜜の流れるよき地であったにすぎない。聖書宗教の生まれたこの地域は，かくて生と死とが背中合わせになっているといった感じを与えるところなのである。死が漲っている中で生が与えられている，生の尊さを深く教えられる，こういったところだったのである。神のめぐみによってのみ支えられて生きていくことのできる人間，一度神の御手を離れると死にのみこまれてしまう，このような砂漠と沃地のぎりぎりの緊張の中で，かれらは，与えられゆるされた生を真に感謝をもってうけとめ精一杯生きたといってよいし，あの生と死をめぐってのかれらの

精神的緊張は，このような風土を考えるとき，頷くことができる。

このような生と死をめぐる聖書の民の現実は，実はすべての人間に通ずる現実ではないか。殺伐たる人生の砂漠において，死の恐怖が迫ってくる中で，本当の生命を喘ぎ求める者の心の奥底に深くつき刺って共感を与えるような現実，それが聖書の中に出てくる現実であるといってよいであろう。

聖書の人々は，生命は人にではなく神の支配に属するのだと信じていた。したがって，たといそれが束の間のものであっても，心からの感謝をもって大切にして生きようとしたのであり，しかもかれらが貧しい奴隷の民，放徨の民であるにも拘らず，顧みられて生きることをゆるされたという，そのような生であるならば，これを神の恩恵にこたえて，神の御心に応じて，御心が成るように用いなければならない，弱きもの，苦しめるもののために生を傾けなければならない，神の御心はそのようなものだ（たとえば申命記10：17—19その他）と，聖書の人々は考えたのである。

ただ人間は勝手なもので，確かにそういった恩恵に支えられて生きていけるようになった訳だが，実際に生活が軌道に乗り始めると，今度は自分自身に生の根拠があるかの如く錯覚し，あるいは意識的に自己主張して生きんとする。旧約聖書冒頭の創世紀の堕罪物語の部分（創世記3章，ヤハウェ資料）に，この辺のかれらの把握の仕方がひとつの物語として出てくる。この堕罪物語は，たしかに生命の木をめぐって生と死の問題にかかわっているが，単純に生と死というよりも話のポイントはもっと深い。神の恩恵によって生きることが許され，与えられているこの人生を，感謝してうけて神の御心にこたえて生きるのか，それとも感謝を忘れて自らを小さな神とし（善悪を知る木の問題はこれにかかわるであろう），自分の力で生きていくことができると思い込んでしまって，自分本位に他を利用してだけ生きるのかというあれかこれかの前に，人間は神の意志，神の信頼に背いて自分中心の生き方をしてしまう。そしてその結果，人は楽園を追放され，かくて死が人間に臨んだ，ということに話のポイントがあるとみてよいであろう。

ここでいっている死ということの中に，人生をめぐる色々なことが集約されている。かれら聖書の民は，死をすべてのものからの断絶としてとらえ，人間をめぐってのさまざまの悲惨，不幸といったものがそこに集約されると考えたのである。そして，こういった悲惨の一番根底には，人間が神に背いたという現実が厳然としてあるという見方をかれらはしたのである。であるから，生と死の問題をつきつめていってそれをのみこむ形で，人格的な背き

の問題，罪の問題が出てくるのである。しかも，このような問題を単に個人の生死の問題にとどまらせず，さらに深い次元で，さらに大きな問題として，民族全体の，そして人類全体の規模で把握し，考えているのである。このような深さと大きさをもって，歴史のただ中で問題をとぎすまし，明確化していったのが，旧約の預言者たちであった。生死の問題を追求しつつ個人の罪と共に，民族全体の罪，さらには人類全体の，歴史全体の罪の問題にまでつきあたった聖書の人々の考え方は，歴史上他に類をみない。

こういった問題の把握と展開全体をふまえて，新約聖書のイエス・キリストが登場してくる。このような大きな規模の罪とその赦しの問題に，イエスの全生涯は集約されている。

4

人間の罪の赦しの問題にイエスの全生涯，全存在はかかわっているとともに，イエスにおいては，深くそれが一人びとりの魂の奥底の問題，お前はどうかと問いかける問題として出てくる。

イエスの相手にした人たちは，いわゆる世の賢者，宗教家たちから見捨てられた，虚無と罪の底に沈んで立ち上ることもできない人たちであった。ここでは，そのような人たちの罪からの解放，人間解放ということ，積極面では悩めるものの真の友となるという問題に，徹底して問題は集約されているといってよいであろう。福音書には，イエスの奇蹟物語とでもいうべきものがかなりある。病と死に脅かされている人たちが，かれの相手でもあったわけである。かれは，病を癒し，気違いを正気に戻し，さらには死んだ者を甦えらせるといった奇蹟を行っているが，これらの物語をよく読んでみると，その核心にきわだった特色のあることに気付く。それは次のようなことである。イエスと，悲哀の底に沈んでいる人（たとえばマルコ5章の長血の女の話），あるいはそのような人と一緒になって苦しみつつ心を砕いている人との間の（たとえば同じマルコ5章の娘を案じるヤイロの話），ほかの何者の介入をも許さない緊迫した人格的な出会いというものが，そこにはある。もちろん，物理的な霊力による民間信仰的な癒しという要素がたしかに物語の中にみられるが，主題はむしろ，そのようなイエスの霊的治癒力と悪霊との関係が，顔と顔とをあわせる愛と信頼の人格的関係に変質するところにあると思われる。イエスに対する病める者，心貧しい者，さらには共に苦しむ者の一途な信頼と，イエスの限りない愛とが火花を散らすところに，人の思い

を越えて何ごとかがおこる。イエスは神の御心に従う以外のなにもしていないのであるから，根源的には，神と，苦しんでいる人との出会い，人格的なかかわりに，中心があるというべきであろう。福音書の記者は，イエスの奇蹟において，イエスの教えが示すものと同じものをみている。それは魔術的ご利益信仰からの解放，まことの信仰，イエスに従ってまことの生を生きることへのすすめということである。イエスは，神への徹底的信仰，人格的信頼に生きたのであり，そこにおいてこそいま苦しんでいる人たちへの限りない愛がほとばしりでているのである。ただ，このことは必ずしも一般民衆には，そして弟子たちでさえも，わかっていなかった。イエスに信頼し全く神中心に生きるかそれを拒否するかの問題であり，それ以外の何でもないことは，わかっていなかった。そして，いざというとき，民衆はもちろん，弟子たちもイエスに躓き，イエスを捨ててしまうのである。

イエスが問題にされたことは，今までのべたように，生と死の問題をその中に含む，より大きな罪からの救いということであった。罪は神との関係においていわれることであるから，中途半端なことは一切許されない。だから，罪の値はまさに絶対否定としての死である。そして，罪の赦しはこの罪の値たる死を負い切ることと別ではありえない。イエスは——これは神の御心がそうであったということだが——相手の罪を背負って，その罰をおのが身にぢかにうけることによってはじめて人の罪はゆるされるのだという，こういう峻厳きわまりない罪とその赦しを明らかにした。救いとはそのようなことなのである。だから，イエスはキリスト，救い主であるということは，罪人，苦しめる者の罪，苦しみを一身に背負う者だということである。これこそ，まことの愛である。

弟子たちには，このことが本当にはわかっていなかった。かれらの最後の関心は，結局は自分の生命の問題に限られており，自分が生きればそれでよいのであり，このことは人間としてある意味では当然ではあるが，かれらのイエスへの信頼は，その限りでの信頼だったのであろう。かれらにとっては，永遠の生命を与えるものであれば，信仰の相手は誰でもよかったのである。それに対して，イエスは，ご自分もそうであるが，イエスに従う者も，まずひとのために自分を捨てよ（マルコ8：34その他）といわれたのである。「自分の」生命に限られた関心を徹底的に拒否されたのである。生死の問題は，イエスに従って，イエスが生きた如く悩める者の真の友となるかどうかの問題であることをのべられたのである。ここでは，どのような意味に

おいても自分とかわたしが中心なのではなく，徹底的にあなたとの関わりそのもの，いや，その関わりでのあなたが中心なのである。このような愛のかかわりの中での自分自身への自分のかかわりが，イエスにより問われているのである。そして，このような捨身の愛に生きることこそ，ほんとうに人間らしい生命を生きることなのであって，――これはまさに逆説なのだが――，自分の生命を救おうと思う者は，逆に永遠の生命を失い，神のためキリストのために自分の生命を失う者は，それを救うであろう（マルコ8：35）といわれるのである。このような捨身の愛に生きるという生き方は全くただごとではない。そして，それはかれ自身の復活信仰に支えられていたといってよいであろう。

イエスの復活信仰は，ひとは一度は死ぬが生れ変るようになっているから大丈夫だというような，生と死の峻烈な区別をぼかすような輪廻の信仰とは無縁である。かれはむしろそのような虫のよい生き方をこそ排撃してきた。それでは，かれの復活信仰とはどのようなものであったか。

ほんとうに捨身の愛を行うとき，ひとはたしかにすべての断絶たる死を死ぬほかはない。むしろ，愛に対してかえってくるのは，丁度イエスがそうであったように，背かれ，捨てられ，孤独のうちに死ぬことである。何の割引きもなくそうなのである。しかし，徹底的に神に従って砕かれたとき，神のわざはあらわとなる。神は，ほんとうによしとみたまうようになしたもう。そのとき，自らのおもいではなく，神の御心が成就する。これがイエスの信仰だったのではないであろうか。だから，神の御心がなるとき，死に至るまで神にのみ従ったものは，まさに神にあって生きる。これが復活であり，ここでの復活信仰は全く神中心の信仰であるといえよう。こういった信仰のみが捨身の愛のわざを生む。

弟子たちは，生命の君たるイエスが殺され死ぬという何としても理解しがたい現実の前に，イエスに躓き，かれを捨てて去ってゆく。福音書の後半に出てくるイエスの受難物語をみると神の御心を徹底的に行うイエスと，イエスがいよいよわからなくなって，とうとう一人のこらずかれに背く弟子たちという対照がきわだっている。罪のない一人のひとの十字架の死と，「あなたはキリストです。」と一度は告白した人たちの離反，これはあまりにも悲惨な対比である。そして，受難物語の一つの中心は，イエスが十字架上でたしかに死んだのだ，その意味ではこの世の力にかれは負けたのだということであった。それで終れば，一人の義人が理不尽にも死んだという事実だけが

のこる。だが，それだけではなかった。このような明瞭な断絶の後に，思いがけない一つの新しいことがおこった，今度こそほんとうに生き生きとした人格的な関係が，一度死んだイエスと弟子たちとの間にはじまったというのである。それが，イエスの復活ということであろう。ある意味では，福音書の記者はこのことを一番核心的なこととしていいたかったようにうけとれる。イエスの復活は，なによりも一度背き去った弟子たちとイエスとの信頼関係——それが実はかれらの生の全部なのだ——の復活だったのである。弟子たちは，一度真実を捨てて師を裏切った。これは文字通りの人格的な背きである。こういった背きは人間の骨の髄までむしばむ。まさに死以上の死である。そのような人たちが，今度こそ雄々しく何ものも恐れず，いや恐れと戦ってキリストに従おうとする。あの捨身の愛に，今度は弟子たちが生きはじめるのである。だから，イエスの復活の秘密は，つきつめると，弟子たちが新しい生命に生きたということになる。キルケゴールに即していえば，ほんとうの自己自身への根源的な関係を回復したということであろう。

5

このようにして，キリストに従う者が生れるわけであるが，キリスト者はイエスの十字架の死に与ることによって肉体の死以上の死を死に，復活に与ることによって肉体の生以上の生を生きる。この世の生は，生存競争の生であり，結局は他人を犠牲にし，相手を踏み台にして生きる，極言すればころす生であるが，復活の生は，そのような生を打破るまことの愛の生命，生かす生である。生と死をめぐる問題の，ほんとうの積極的な解決がここにある。このようなイエスと弟子たちとの関係，そこでの躓くか信ずるかが，同時にイエスとわれわれ一人びとりとの関係，躓くか信ずるかであることを，キルケゴールは自分の生の体験に即して，同時性の問題として明らかにしようとしたのであろう。

「死に至る病」とは，イエスに従うか拒否するかの信仰的な決断を回避することであり，そういう決断そのものに絶望することであった。この世の生は，いわば死ぬる生（Leben zum Tode）であるが，復活の生命こそは，「死に至る病」を根治して，まことの希望と愛の決断を生む。永遠の生命に生きることは，こういうことであろう。キリスト教における人間の生と死の問題，それはこれだけの含蓄，重みをもっている。

附　記

この論文は1972年11月11日本学において行われた北星学園大学10周年記念学術講演会における筆者の講演の草稿に若干手を入れたものである。参考文献としては S. Kierkegaard: Gesammelte Werke, übersetzt von E. Hirsch u. a. 中の Philosophische Brocken, Abschliessende unwissenschaftliche Nachschrift, Christliche Reden, Die Krankheit zum Tode, Einübung im Christentum, Zur Selbstprüfung der Gegenwart unbefahlen, およびそれぞれの Princeton U. P. 版の英訳，白水社版の邦訳，H. Diem, Dogmatik und Existenz, R. Thomte, Kierkegaard's Philosophy of Religion, D. Patrick, Pascal and Kierkegaard, E. J. Carnell, The Burden of Sören Kierkegaard, 特にキルケゴールのキリスト教理解，思想構造理解については杉山好，小川圭治両兄の諸論文に多くを負った。聖書理解については拙著「聖書の思想—キリスト教思想の根柢—」を並読されれば幸いである。

The Sickness unto Death

——Christian Understanding of Life and Death of Man——

Minoru AKITA

1. Kierkegaard's "Sickness unto Death".
   a) The subjects which he brings out.
   b) The meaning of 'Despair'.
   c) The problem of life and death and the problem of sin in man himself.
2. Kierkegaard's God and Biblical God.
   a) Kierkegaard's existential understanding of God and man.
   b) Kierkegaard's understanding of life and death and the Biblical.
3. Biblical understanding of life and death 1.
   a) Historical and climatic background of Biblical understanding.
   b) 'Sin' and 'life and death' in Gen. 3.
4. Biblical understanding of life and death 2.
   a) The Gospels' understanding of this problem.
   b) Death and resurrection of Jesus and his disciples.
   c) The new life in Jesus' disciples.
   d) The problem of simultaneity (coexistence) of Jesus and us.
5. Conclusion
   'Life and death' and 'the eternal life'.

Die Entstehung des Begriffes ἅγιος in dem Urchristentum

Yukimaro AMAGAI

Die Entstehung des Urchristentum erweist sich die theologische Bewegung. Die Bewegung ist die Ent-zentralisierung der urchristlichen Gemeinde an Jerusalem. Die Gemeinde in Kleinasien wieder-interpretiert die christlichen Überlieferung. Es bedarf das neue hermeneutischen Kriterium. Wir finden sich dieses hermeneutischen Kriterium an dem Begriff ἅγιος. In Verlauf der Zeit AT→Pls.→Epheserbrief erweist sich die Verweltlichung oder Säkuralisierung der christlichen Überlieferenung unter inneren gnostischen Denkweise.